

巻 頭 言

人文学部長
吉田 正明

人文学部は、平成25年度よりこれまでの2学科から1学科に学部改組を行った。これは、それまでの「人間情報学科」と「文化コミュニケーション学科」の2学科制から、「人文学科」1学科制にすることにより、分野を一部再編統合し、段階的・階層的専門知の修得が可能となるカリキュラムに体系化するとともに、人文学部に設けられている多様な分野の科目を幅広く学生に履修させることを狙ったものである。これにより、課題であった狭い専門分野のみに閉じこもった専門知識の習得から、人文学全般に亘る幅広い知識の習得を通じた汎用性ある総合的な実践知の涵養が叶うこととなる。

また、現在大学は、学生や社会から国際化への対応を期待されているが、平成23年度から取り組んでいる「外国語サロン・多文化交流サロン」の実施や、学部改組によって新たな履修要件となった外国語指定科目の習得を通じて、実践的な外国語のコミュニケーション能力を身につけたグローバル人材の育成が期待できる。

この改組に伴い、本学部紀要も、これまでの学科別の分冊から、『信州大学人文科学論集』1冊にまとめられることとなった。実は、本学部は平成7年度（1995年）に1学科から2学科に改組されているが、それ以前は1冊の紀要であったのだから、かつての紀要に回帰したと言えなくもない。

ただ20年前とは大学を巡る社会状況が大きく変化したのも事実である。最近の経済財政諮問会議や産業競争力会議などの答申を見ると、理系の人材育成に大きく比重が傾いており、文系など政府の眼中にないかのような文言も目立つ。大学改革実行プランにしても、ミSSIONの再定義にしても、大学は改革に向けて鞭打たれ、概算要求する場合も改革を前提としない予算要求に対してはいっさい耳を貸さないという文科省の偏向した考えが顕著に窺える。このままでは経済復興・経済効率の優先ばかりに目がいき、思想・倫理・歴史・文化・芸術・言語・心理・人間行動といった人間の心や本質、根源的な人間の営為や精神活動を研究対象とする人文学が軽視され等閑にされる一方であろう。

果たしてそれでよいのか？少なくともわれわれ人文学に携わる研究者は、こうした時代の流れに迎合することなく、人類の歴史や文化、社会や言語、人間の心理や行動や思想といった根源的問題の考究を貫き通す覚悟とプライドだけは捨てないようにしたいものである。

本学部は、旧制松本高等学校を母体とし、新制大学発足後の文理学部以来、信州に立地する国立大学唯一の人文系教育研究の拠点としての役割を果たし続けて今日に至っている。特筆すべきは、哲学・思想論から社会学、文化情報論、心理学、社会心理学、歴史学、日本語文化、比較文学、諸外国の言語文化、芸術コミュニケーションに亘る多様な分野が体系的に備わっており、地方国立大学人文系学部としては充実した魅力ある教育研究組織であるということである。

この強みは、人文科学研究科にあって、狭い専門領域の枠を超えた、多様な学問分野の研

究手法を糾合した幅広い視野の涵養や、柔軟で創造的な研究技法の修得・練磨に極めて有効であり、ややもすれば専門領域に閉じこもりがちな大規模研究科ではなしえない、本研究科ならではの総合的・比較論的・学際的な教育研究に生かされている。それは研究指導の成果を検証する場である年2回実施される、全分野教員参加型の「大学院シンポジウム」の白熱した議論に窺うことができる。

こうした領域横断的な活発な議論を通して、人文学の新たな地平が拓かれていくことが期待されるのである。そして最後に、本学部教員の研究者としての質の高さに触れておきたい。本学部の研究の強みは、それぞれが多様な人文学の学問分野に立脚しつつ、幅広い分野で魅力的で独創的な研究を推し進めていることである。そのことは、最近の科研費の採択率の伸びを見てみても窺い知れる。因みに平成25年度の科研費の採択状況は、有資格者46名中31名が科研費を獲得しており、保有率は67.4%となっている。それらの研究課題を一瞥すると、興味深い多様なテーマが並んでおり、人文科学の百花繚乱といった感がある。

新たに生まれ変わった本紀要が、そうした質の高い独創的な研究成果の発表の場として活用されていくことを願って止まない。